

# 東京都大田区を対象とした大田クリエイティブタウン研究会の

## 取り組み その4

### Achievements of “Ota Creative Town Unit” in Ota-Ward, Tokyo Part 4

岡村 祐\*・川原 晋\*・野原 卓\*\*

Yu Okamura Susumu Kawahara Taku Nohara

#### 摘 要

本稿は、首都大学東京が横浜国立大学、東京大学、大田観光協会とともに取り組む「大田クリエイティブタウン研究会」の平成25年度の成果をまとめたものである。3回目となる「おおたオープンファクトリー」は、他地域との連携を深めたり、「産業観光まちづくり大賞」金賞を受賞したりするなど、その取り組みをひろく発信することができた。また、オープンファクトリーを契機として見出された工場長屋の一角の事務所・工場をリノベーションして「くりらぼ多摩川」をオープンし、今後創造活動拠点としての活用が期待されている。さらに、本研究会の活動も5年目を迎え、大田クリエイティブタウン構想の実現に向けて、来年度以降さらなる活動の布石を打つことができた。

#### I. はじめに

##### 1.1 本稿のねらい

本稿は、岡村ら(2011)、同(2012)、同(2013)に続き、首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域が横浜国立大学、東京大学及び一般社団法人大田観光協会等との連携によるPBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)の一つとして取り組まれている「大田クリエイティブタウン研究会」の平成25年度の成果をまとめたものである。特に、工場一斉公開イベント「おおたオープンファクトリー」及び創造活動拠点として新たに整備した「創造製作所〜くりらぼ多摩川」を中心に報告する。

##### 1.2 大田クリエイティブタウン研究会と大田クリエイティブタウン構想

大田クリエイティブタウン研究会は、平成21年に「モノづくり観光研究会」として結成され、平成23年4月に現名称に改名した研究組織である。東京都大田区を舞台に、観光およびまちづくりの分野が培ってきたアイデアや技術によって、モノづくりのまち大田の再生を目指したまちの将来構想を立案し、各種調

査や実践的プロジェクトに取り組んでいる。

既に、岡村ら(2011)、同(2012)などで報告しているように、工場訪問ヒアリング調査、工場建築調査等のモノづくりに関わる多様な資源(製品、技術、職人、工場建築、都市基盤等)を浮き彫りにするための基礎調査、あるいはモノづくり観光の実験的イベントを積み重ね、モノづくりを基盤としたまちづくりの方向性や具体的なプロジェクトを提起した『大田モノ・まちBOOK2011』(2011年度)のなかで、「大田クリエイティブタウン構想」を提案してきた。本構想では、11のプロジェクトが示されたが、なかには既に実現しているものもある。町工場のモノづくり技術を生かしつつ、消費者に近づけやすい「モノづくりたまご」に始まり、これを生み出しているイベント、「おおたオープンファクトリー」によるエリアプロモーション的展開、そしてこのイベント時に小拠点として用いた工場・事務所跡を改修した、創造活動拠点である「くりらぼ多摩川」を設置するなど、プロジェクトは連鎖を続けている。

#### II. おおたオープンファクトリーの企画

##### 2.1 おおたオープンファクトリー2013

既報のとおり、オープンファクトリーとは、ある特定のエリアにおいて、期間限定で複数の工場を公開し、見学・体験プログラムやツアーを提供し、モノづくり

\*首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (10号館)  
e-mail: okamura@tmu.ac.jp

\*\*横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院

及びモノづくりのまちを地域内外にアピールするイベントのことである。イベント開催日を2013年10月26日(土)に設定し、前回の第2回(2012年12月1日開催)同様に、大田クリエイティブタウン研究会と地元工業団体である工和会協同組合から構成される「おおたオープンファクトリー実行委員会」を組織し、夏頃から本格的に企画作業に着手した。



図1 オープンファクトリーのチラシ

## 2.2 前回からの変更点

3回目を迎える今回は、「おおたモノ語り～職人が1年で1番しゃべる日～」というテーマを明確に打ち出し、工場の経営者や職人たちの生の声に耳を傾ける機会を多く設けるようプログラムに工夫をこらした。とくに、「モノ・ワザ トーク」という職人数名が登壇するトークショーを企画した。若手職人とベテラン経営者がそれぞれの立場からモノづくりの魅力や課題を話してもらえるよう人選した。

その他の特徴としては、拠点の強化があげられる。これまで駅前拠点は下丸子駅前に限ってきたが、武蔵新田駅前にも、「インフォボックス」を設置することとした<sup>1)</sup>。また、前回は、工場が集積する工場長屋の一角を「まちなか工場カフェ」として利用してきたが、その場所をリノベーションした「くりらぼ多摩川」(Ⅲで詳述)として、ワークショップや休憩場所(カフェ)として活用することとした。

さらに、他地域との連携を深めたことも、今回の大きな特徴と言える。上述の「くりらぼ多摩川」では、墨田区を拠点に活躍する「配材ワークショップ」を招いて、ワークショッププログラムを提供してもらうこ

ととした。また、川崎市は、既に事業化に成功している産業観光ツアーの一つにおおたオープンファクトリーを見学するコースを設定した。

## 2.3 台風による中止と代替開催の決定

順調に準備が進むなか、オープンファクトリー当日に台風27号が関東地方に上陸する可能性が高まったため、前々日の段階でやむなく中止の決断をした。ただし、後日に実行委員会を開催し、2月15日(土)に代替開催をすることを決定した。なお、代替イベントについては、次稿で述べることとする。

## 2.4 「産業観光まちづくり大賞」金賞の受賞

おおたオープンファクトリーは、公益社団法人日本観光振興協会が表彰する「産業観光まちづくり大賞(第7回)」に応募し、金賞を受賞した(平成25年11月21日)。同時に受賞した室蘭や宇部などの産業観光先進地とともに受賞し、大田の取り組みを全国に発信できたことは、主催者としてはたいへん喜ばしいことである。

主催者側から評価された点としては、以下4点に整理できる。第一に、経営環境の厳しい大田区のモノづくり(生産)現場を産業観光資源として捉え、モノづくり現場の再生や活性化を図るため産業観光に取り組んだ点、第二に、優れた体系的な仕組みを構築し、顧客属性毎にプログラムの差別化を図ることにより、企業側のニーズもうまく取り込んでいる点、第三に、観光客の受入窓口や対応、産業観光資源としての魅力を着実にアピールし、イベント継続へのステップも十分に進められている点、第四に、外国人観光客にとっても、日本のモノづくりの原点を見聞することは非常に興味深い分野であることから、羽田空港の国際化に伴い、「おおたオープンファクトリー」を外国人観光客にも提供することで更なる国際化が期待される点である。



図2 「産業観光まちづくり大賞」表彰式の様子

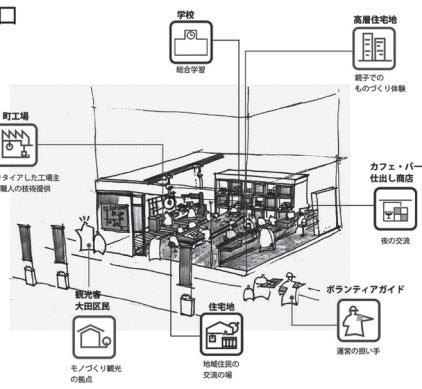
### Ⅲ. くりらぼ多摩川

#### 3.1 施設のコンセプト

「くりらぼ (クリエイティブタウンラボ) 多摩川」とは、大田区矢口の工場長屋内にある旧工場・旧事務所部分を改修して、クリエイティブタウンの魅力づくり、「モノづくりのまちづくり」を行うための、公×民×学協働による創造活動拠点である。

前述の「大田クリエイティブタウン構想」の中では、地域でモノづくりのまちづくりを推進するには、この動きに関わる主体が集まって活動し、それに工場主や市民も集まるような「拠点」が必要であること、また、こうした創造拠点を生み出すために、工場ストックなどを活用することなどが検討されていた。大田クリエイティブタウン研究会は、これまで町工場を若者や女性でも働きやすい工場の作業環境を高めるリノベーションや、空き工場、モノづくり関連のクリエイターが利用する SOHO やアトリエ、住まいを提供する空間にコンバージョンする提案、そして、職人たちが夜にも集まって楽しく過ごす BAR (町工 BAR) の提案等を行うなど、多様な視点で工場ストックの活用を検討してきた。

1. 体験・ツアー窓口
  - ・工場見学ツアー窓口
  - ・簡単な体験イベント
  - ・学校との連携
  - ・長屋梁山泊
2. 創造発信
  - ・展示会
  - ・クリエイティブイベント創出
3. 創造育成
  - ・クリエイター活動
  - ・製品化の取組み
  - ・持ち込み企画
4. 交流
  - ・大田モノ語り恒常化
  - ・町工 BAR・カフェ
  - ・貸し共同会議室



#### 「くりらぼ多摩川」の基本コンセプト

図3 くりらぼ多摩川のコンセプト

#### 3.2 施設の空間計画・デザイン

こうした検討を重ねる中で、これまで調査・イベント・製品づくり等で協力を仰いでいた町工場も入居する工場長屋の一角に、数年前まで町工場として活躍していた小さな空き工場・空き事務所のあることがわかり、イベント「おおたオープンファクトリー」当日には、「まちなか工場カフェ」という交流拠点の一つとして一時的に活用を試みたが、その空間を、いよいよ大田観光協会が貸借し、創造活動拠点として改修することとなった。

空間としては、油の匂いと心地よい機械の音が溢れ

出すモノづくり空間に漂う記憶を受け継ぎながら、新しいモノづくりのまちづくりが育まれる、「創造製作所」というキーワードでの空間づくりを目指して改修を行った。面積は、計 60 m<sup>2</sup>程度の小さな場所であるが、なるべく空間が持っている佇まいを受け継ぎ、通り沿いに面する小さな旧事務所空間 (くり棟) は、地域に開かれた、「モノづくりのまち」の交流・発信の場となることを目指し、路地の奥にある旧町工場空間 (らぼ棟) は、下見板張りで床には油の光る油と機械のモノづくりの空気感を大切に、モノづくり体験やワークショップ、簡単な製品開発、イベントなどが可能な、価値を生み出す創造の場となることを図り、改修を実施している。現在、工場棟には、ドラマ「梅ちゃん先生」内の安岡製作所のセットで使用されていた旋盤等の機械が設置されており (修理すれば動かすことも可能)、小さなモノづくり観光拠点としても期待される。



図4 くりらぼ多摩川 (くり棟) の外観

#### 3.3 施設の機能

ここで期待される活動は、「モノづくりのまちづくり」実現のためのクリエイティブ活動全般だが、モノづくり・まちづくり・観光を核とした活動をきっかけとして考えている。モノづくりの価値を区民や消費者、子どもたちに伝えてゆくために、モノづくり体験やワークショップ、スクールなどは人気も高く、継続的な実施が望まれる機能である。また、生産そのものだけでなく、「モノづくりのまち」の歴史文化も含めて体感するためのまちめぐり拠点として、あるいは、産業観光の側面から、個々の町工場が個別に受けていた工場見学を取りまとめた、見学ツアーの窓口となることも期待される。

旧来の産業関係だけでなく、クリエイターやデザイナーの活動・発信の場、クリエイターインレジデンス等として、あるいはモノづくりとデザインのマッチング活動誘発の場として、小さな商品開発なども行われると、創造性の高い活動に発展しうる。さらには、デ

デザイン性の高いモノづくりのまち発信の場として、MAP や通信、Web や SNS など駆使して、魅力あるコンテンツを編集する機能、あるいは情報を集約し、モノづくりにかかると書籍も集めたブックカフェ的な機能も期待できる。

そして、小さな町工場が持つことのできない会議室や商談室の代わりとして、小さな会議ができる場所として地域で活用ができるほか、夜な夜なモノづくり現場の人たちや地域の方々、クリエイティブワーカーが集まるカフェや BAR (町工 BAR) などとして、交流を促すことも検討されている。

### 3.3 運営体制・プログラム

すでにプレオープンとして、地域の小学生たちを対象に、ペーパークラフトやカメラ解体などを行う「子どもモノづくり教室」(2013年7月)や、NPO 法人大森まちづくりカフェ主催で、酒百氏(東京工科大学)を講師として、大田の町工場で使われた道具や備品のフロッターージュを行う、「オオタノカケラ」ワークショップ(同9~10月)が開かれまるなど、モノづくりや創造活動の場としてどのように使えるか、試行的な利用を経て、2013年12月11日に、正式にオープンした。

現在は、オープンしたものの、実態としては、総合戦略を実現する空間としてはどうマネジメント・活用すればよいのか、テスト期間としての運用であるが、大田観光協会が事務局となりながら、3大学、そして大田区(観光課)が中心となり運営するほか、町工場の社長、地域の区民まちあるきガイドを育成・実施している「大田・品川まちめぐりガイドの会」、地域の歴史を大切にする「六郷用水の会」、学校教育やまちづくりの経験豊富な NPO などをパートナーとして、それぞれに企画を依頼しながら多様なモノづくりのまちづくり活動の創出を目指して運営している。

運営方式としては、前述の運営(事務局)メンバーが主催する自主企画、パートナーが中心となって実施する連携企画、そして、クリエイティブタウン戦略の趣旨に沿った活動の場所として利用してもらう空間利用という3種類の方式での運営を模索している。現在は、活動を実施する日のみが稼働している状況であり、機能としどんな使い方がフィットするのか手探りの状態であるが、将来的には、恒常的に開かれ、とりあえずくりらぼ多摩川に行けば、モノづくりやクリエイティブなまちづくり活動をしている人々に気軽に会える、フラットな拠点空間の育成が期待される。

## IV. 研究会の今後の展望

### 4.1 クリエイティブデザインセンター(仮)の設置に向けて

おおたオープンファクトリーやくりらぼ多摩川をはじめ、大田クリエイティブタウン構想にあるプロジェクトを円滑に実現するには、こうした総合的な取り組みの受け皿が必要となる。現在研究会では、各主体がフラットに気軽にに関わり合い、公(行政やNPO)×民(地域や企業)×学(大学や専門家)、それぞれの役割や特徴を持ち寄りながら、創造的なまちづくりを展開できる、「クリエイティブタウンデザインセンター(仮)」の設立を検討し、各関係主体に対してはたらき掛けを行っている。

その端緒として、今年度は千葉県柏市にあるアーバンデザインセンター柏の葉(UDCK)の視察や区役所幹部との勉強会「くりらぼ多摩川会議」等を企画したが、次年度以降も継続的に実施していく予定である。

### 4.2 おおたオープンファクトリーの次の姿の検討

これまでのおおたオープンファクトリーの企画・運営を通じて、研究会としては、『モノ・まち BOOK2012』における方法論構築、地域の工業団体・企業の主体的参画、他地域との連携・波及、「観光まちづくり大賞」金賞受賞による全国的発信など、一定の成果が得られたと考えている。そこで、次の展開についても議論を進めているところである。

一つの目標として、オープンファクトリーを大田区全域に拡張することである。現在、下丸子・武蔵新田駅周辺エリアに限定しているが、工場ごとの自律的参加と簡易な全体とりまとめを基調としたプログラム構築を検討していく必要がある。

もう一つは、東京東部の墨田区、台東区、燕市・三条市、大田方式を参照した横浜市港北区など各地でオープンファクトリー開催の動きがみられ、これらと連携を強め、全国や世界へ発信していくための「オープンファクトリーサミット」を開催するというのである。

いずれにしても、今後は予算的な側面や情報発信の側面からも行政との連携が不可欠である。公(区役所)、民(観光協会、企業)、学(大学)の連携をますます深めながら、上記の検討を進めていく予定である。

謝辞

大田クリエイティブタウン研究会の調査研究活動に関わ

る経費は大田観光協会からの業務委託費，ならび科学研究費補助金（研究題目：「住工混在地区におけるエリアコンバージョンを通じた地域マネジメント手法に関する研究」，研究代表者：野原卓）によるものです。ここに記して感謝の意を表します。

#### 脚注

- 1) 台風で中止となった当初企画では旧銭湯前のスペースであったが，代替企画では駅前の旧売店を活用した。
- 2) 「産業観光まちづくり大賞」は，観光による地域振興の新しい手法として注目されている「産業観光（産業遺産や，現在稼働している工場・工房などを活用した観光）」による観光まちづくりを実践し，他の地域の模範となる優れた事例を表彰する制度のこと。

#### 参考文献

- 大田クリエイティブタウン研究会 2012. モノ・まち BOOK2012 ～第 1 回おおたオープンファクトリー成果報告書～.
- モノづくり観光研究会 2011. モノ・まち BOOK2011 ～クリエイティブタウン大田をめざして～.
- 岡村祐・川原晋・野原卓 2013. 東京都大田区を対象とした大田クリエイティブタウン研究会(旧モノづくり観光研究会)の取り組み その 3. 観光科学研究 No.6 首都大学東京観光科学域: 177-182
- 岡村祐・野原卓・川原晋 2012. 東京都大田区を対象としたモノづくり観光研究会の取り組みその 2：首都大学東京大学院観光科学域における PBL 報告. 観光科学研究 No.5 首都大学東京観光科学域: 185-190
- 岡村祐他 8 名 2011. 東京都大田区を対象としたモノづくり観光研究会の取り組み：首都大学東京大学院観光科学域における PBL 報告その 1. 観光科学研究 No.4 首都大学東京観光科学域: 123-127
- 野原卓・川原晋・岡村祐 2012. モノづくりのまちからクリエイティブタウンへ～大田区での取り組み～. 日本建築学会（東海）都市計画部門パネルディスカッション資料: 55-58.